
ネーム！！

timu

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネーム！！

【Nコード】

N8896Y

【作者名】

timu

【あらすじ】

一度はマンガ家の夢を諦めた一人の少年が再び夢に向かって走り出す！！

憂鬱と男子

——俺はマンガ家になりたかった。しかしなれなかった。なれなかったというよりは諦めざるをえなかったという方が正確だろう。

マンガかを目指すうえで大事になるのが『画力』である。「画力が無ければ、いくらよいアイデアや話が出来たとしてもすべてムダになってしまう。マンガ家を目指す者として画力があるというのは大前提なのである。しかし、俺にはその画力というものがなかった。自分で言うのもなんだが、話には自信がある。だが、その話を最大限にいかせるような画力は俺の中には存在しなかった。

その場合、2人で書くという方法がある。1人が話を考えて、もう一人が絵を担当するといった感じだ。だが、残念なことに俺の通う中学には絵が上手い奴はいても、マンガの絵が描けるような奴は存在しておらず、結局どれだけ探しても相方を見つけることは出来なかった。

そうだった経緯で俺は、マンガ家という夢を諦めたわけである。

その時たしかに俺——本城透ほんじょうとおるは思った。

夢は持っただけムダなのだと……。

<ネームと担当>

「……ああ、まだだ」

気がつく俺はコンビニでマンガを立ち読みしていた。読んでいるというよりは眺めているだけ。

俺はよく、夜食を買いにコンビニに立ち寄る。中学3年となった今、受験勉強をする必要があるため徹夜用に夜食をストックしておく必要があるのだ。

「……あのお、そのマンガ、買ってもらってもいいですか？」

女性店員が少しキレ気味に俺に告げてくる。もう、かれこれ1時間近くもマンガを眺めているためそう言われても仕方がないだろう。

「すいません」

急いで手元のマンガを棚に戻す。その行動を見届けて女性店員はレジに戻って行った。

「……何やってんだろ、俺」

そう呟いて棚に戻したマンガに目を向ける。

俺は中学に入った時、マンガ家を本気で目指していた。下手だった絵もどうにかなると思っていた。だが、現実はその甘くはなかった。絵が上手になることはなく、むしろ自分の下手さをよく理解したほどだ。徐々に進路についても考えなければならなくなりマンガ家への道がどれだけ大変なのかハッキリした。

そして、中学2年の春、俺はマンガ家という夢を諦めた。

「夜食買って帰るか……」

俺はそれからガムとおにぎりとコーラを買って店を出た。

「もう、こんな時間かあ」

ケータイの画面を見ながら呟く。画面に映る時計は7時30分を表示している。俺は急いで自転車に乗り、ペダルに一気に力を込めて自宅へ直行した。

――自

宅にて――

「――こんな時間までなにしてたの!？」

母である晴美はるみの怒声が居間中に響く。まあ、コンビニに行くと言つて1時間近くも帰ってこなければ怒られても仕方がない。

「商品を選ぶのに手間取ったんだ……」

もちろん、ウソである。

「透も受験生なんだからもうちょっと、しっかりしてちょうだい」
母がため息まじりに告げる。悲しい顔をされると、どう言っているのか分からなくなる。

「分かってる……」

それだけ言い残して俺は逃げるように自分の部屋へとつづく階段を駆け上がった。

部屋に入るなり、俺は勢いよくベッドに飛び込み、しばらくじっとしてから天井を見つめた。

「……しつかりなんてできるわけないだろ……！」

勉強しようとするといつも頭の中にマンガの事が浮かんでくる。今でも机の横の棚には少しだけだがマンガが並べられている。そのマンガを見る度に俺の心は締め付けられた。

「よし！ 明日、帰ったらマンガに関係するものを全部捨てよう……！」

そう、決意して俺は受験勉強に取り掛かった。ちなみに教科は……数学！

10月19日、朝6時30分、俺はいつものようにケータイのアラームの音で目を覚ました。家では家を出る1時間前には起きるというルールのようなものがある。特に罰があるわけではないが、昔からやっているで今では当然のようにしている。

「今日は水曜日だから……これにしよう」

よく分からない自分ルールで制服の下に着るT・シャツを決めるちなみに今日の色は水色である。

「とおる、朝食出来てるわよ」

一階から母の声が聞こえてくる。俺は急いで部屋を出て階段を駆け降りた。

今日の朝食は目玉焼き。適当なのがよく分かる。おかげで早く朝食が終了した。

「どうしようか………？」

とても迷う。普段はもう少し朝食を食べ終わるのが遅いのでこういう時はどうするべきか分からない。俺は椅子に座ったまま考える。「学校に行って勉強でもしたらどう？」

台所で家事をしている母が突然、提案してきた。意外にもその提

案が良かったので俺は少し早めに学校に行くことにした。

7時10分。俺はいつもより20分も早く家を出た。10月の朝ということもあり肌寒いのが印象的だ。

「……寒いな、やっぱり」

1人でポツリと呟きながら歩く速度を少し上げた。

俺の通う都立第三中学では学校から半径2?圏内の人以外のみが自転車通学を認められている。そのため俺は3年間ずっと歩き通学なのだ。

（あと少しだ……!）

心の中で呟きながら俺はさらに歩く速度をあげたのだった。

結局、俺が学校に着いたのは7時25分だった。いつも来る時間帯ならもっとたくさんの人がいるはずの昇降口も今日はやけに静かである。

「朝ってこんな感じなんだ……」

意外な事実に驚きながらも俺はスリッパに履き替えて自分の教室のある3階へと続く階段を上る。カツッ、カツッという音が妙に響いた。

（やっぱりこの時間帯だと生徒がいらないんだな）

そんな事を思いながら階段を上り切り、教室の扉を開けると――
教室内で1人だけポツリと座っている男子生徒がいた。

ネームと担当

(……え〜と？ あいつは確か、大畑直人だっけ？)

おおはたなおと

開いた扉の前でそんな事を考えながらふと、大畑の方を見ると大畑の方もこちらを見ていた。

(やべっ！ いや、やばくはないか。てか、どうしたら……？)

考えても良い方法は浮かばなかったので、俺は目をそらすと急いで自分の席へ向かった。幸いにも俺と大畑の席は遠い。

大畑直人、成績優秀でテストならいつも5番以内(だと思う)。

先生からの評判も良かったため、まさに世渡り上手と言ったところだろう。しかし、あまり派手な人物ではないので目立ってはいない。

(大畑っていつもこの時間帯に来てんのか？)

1つの疑問が浮かぶが聞く気など全くない。聞く気があったとしてもこの空気ではたぶん無理だろう。

――3分後――

「……あのさ！」

しばらく続いた沈黙を破ったのは大畑の方だった。

「なんだよ……？」

いかにも素っ気なく返答するが、心の中ではなぜか緊張していた。

「お前、マンガ好きだろ」

あまりにも衝撃的な言葉で思わず気を失いそうになる。

「……そんな固まらなくてもいいだろ？ 別に悪い事じゃないわけだし」

俺は何も言い返せない。下を向いているだけで精一杯だった。下を向きながら俺は必死に考えた。なぜ、こいつに俺がマンガ好きなのがバレているのかを……。

「なぜ？ って顔だな」

さすがは秀才、俺の異変にすぐに気が付く。

「なんで知ってる？」

俺は決心して顔をあげるとストレートに疑問をぶつけた。大畑は少し戸惑った様子だったが一呼吸おいてから語り始めた。

「……ずっとコンビ二で見てた。最初は『ジャ。プ』を長い時間読めるだけかと思ってた。だけど途中で気が付いた。あれは眺めるだけだつてな。眺めるだけなんてよっぽどマンガが好きかただのバカのどっちかだ。だから、お前に聞いてみた」

さすがは秀才、推理力が並大抵ではない。

「——で、俺がマンガ好きならどうなわけ？」

どうせ返ってくる答えは条件だとか脅しだろうと心の中で考えながら答えを待つ。

「お前さ……マンガ家にならないか!？」

「はあ!？」

意外な答えすぎて思わず大きな声が出る。

「そんなの無理に決まってる! 大体、お前は俺の画力を知ってるのか？」

「知ってる。中1の時にお前のノート見たらマンガが描いてあったから全部読んだ」

なんなんだこいつは。……ありえない。

「確かにあの絵じゃ、マンガ家なんて無理だろうな」

大畑はそういうとハハツと笑う。分かっているけど下手だと言われると無性に怒りがこみ上げてくる。

しばらく笑った後、大畑は「でも」と発した。

「——話はおもしろい」

なにが言いたいのかサッパリ分らない。

「なにが言いたい……?」

とりあえず思った通りに伝える。

「マンガ好きのお前なら『ネーム』って言葉くらい知ってるよな?」
それくらいは常識だ。ネームと言うのはマンガを描く上での下書きの様なものでマンガの基礎となる。

「黙ってるって事は知ってるよな?」

大畑がニヤついている。正直、気持ち悪い。

「大体、お前の言いたいことが分かった」

「分かってくれたか!？」

「ああ。絵がダメならネーム、つまり話で勝負しようって事だろ？
おもしろいじゃないか」

「だろ？」と言って大畑がまたニヤける。

「だが、一つだけ条件がある」

「条件？」

大畑が聞いたのを合図に俺は人さし指を大畑の顔の前で立て、
「やるからには途中で投げ出さないこと！ 誓えるか!？」

そう言っただけ俺はニヤリと笑う。俺の言葉を聞いて大畑もニヤける。
「当たり前だろ!」

——ここに、コンビが誕生した。

「で、どっちがどんな担当するんだ？」

俺が机を向い合せにしながら尋ねる。

「担当って？」

大畑が当然のように尋ねてくる。

「いや、どっちがアイデアとか話作りとか……」

椅子に座って答える。その瞬間、大畑が「は？」と言った感じになっ
て、

「俺は、考えねえよ。俺はお前の担当編集者になるわけだし」

「はあ!？ お前それ、マジで言ってるの!？」

思わず声が荒くなる。でも、当然だ。担当編集者になるなんて聞
いたことがない。

「そりゃそうだろ。ネームに2人もいららないだろ？」

大畑の方も当然のように返答してくる。

「まあ、そうだけど……」

「じゃあ決まりな! そのかわり、絶対にいいアドバイスをするか
らさ! お前は出来たアイデアとかネームを見せてくれればいい。

もしよかったら俺も一緒に話を考えたりするよ!」

まあ、大畑の言うことにも一理ある。確かに、大畑のアドバイスは的確そうだなと一瞬思う。

「……分かった。それでいいよ」

「そりゃ、どうも」

こうして、俺は大畑（担当）とコンビを組むことになったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8896y/>

ネーム！！

2011年11月27日19時48分発行